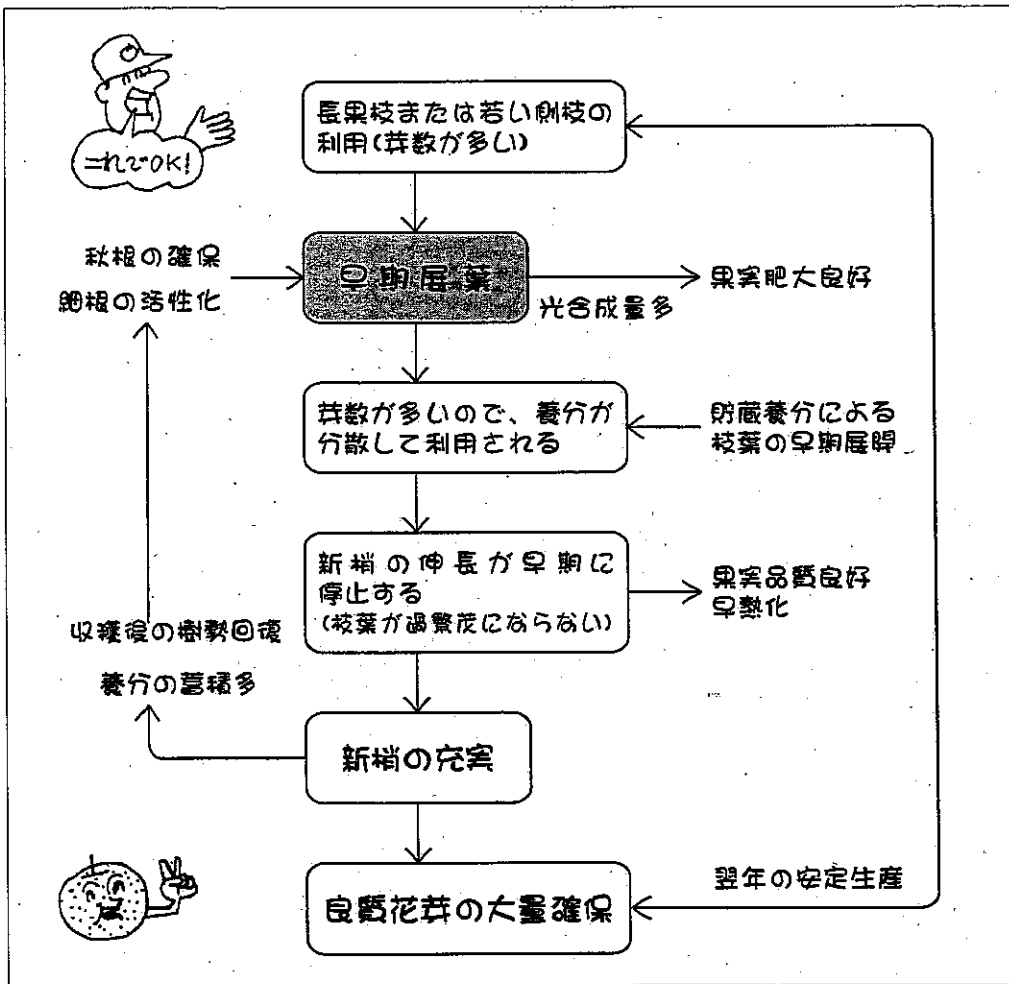


高品質化へ、基本管理を徹底しましょう！

落葉果樹の開花・結実期の管理



佐賀県果樹試験場 落葉果樹研究担当 特別研究員 福田 浩 幸



第1図 早期展葉でよい循環がつけられる

三月はナシ、モモの開花期をむかえます。人工授粉など、時間との勝負でもあります。作業がスムーズに進むよう、早め早めの作業をお願いします。

ナシ

花芽の整理

主枝、亜主枝、側枝の先端は、新梢の伸長を促すため必ず除去します。

そのままにしておくと新梢の伸長が遅れるので、必ず除去してください。短果枝は、一短果枝一花芽を基本とし、不要な花芽はハサミを使って除去します。えき花芽については、花芽を除去すると盲芽となり葉数不足になりますので、摘らいで対応します。

摘らいの実施

花の咲くエネルギーを葉へ多く分配するために、重要な作業となります。手間がかかる作業ですが、えき花芽を中心に実施してください。

確実な授粉

結実をはかる上で、重要な作業となります。従来の粉による授粉でも液体授粉でも、確実な仕事をするのが大切です。

使用する花粉の発芽率の確認など基本的な部分をしっかりと行っておきましょう。(溶液授粉方法については、三月号の記事を参考にしてください。)

早期摘果の実施

果実は、満開後三〇日頃までは貯蔵養分で肥大します。

その後は葉で作られた養分で生育しますので、できるだけ早く果実数を制限する必要があります。一果そう一果は授粉後二週間までに、仕上げ摘果は授粉後三〇日までに行ってください。

早期展葉をはかる

確実に結実させた果実を順調に肥大させるためには、早期展葉(葉数確保)が必要です。早期展葉ができないと、満開三〇日後以降の果実肥大の停滞が続き、六月に入ってもあまり肥大しません。

このような果実は梅雨期の降雨によつて裂果が発生しやすくなり、小玉で糖度も低い果実となつてしまいます。

また、果そう葉は小さく葉色も薄くなり、新梢伸長が進まず新梢の停止期が不明瞭となります。

梅雨期には果そう葉の落葉が多く、新梢の二次伸長が始まります。このため花芽分化が遅れ、えき花芽の着生が悪くなります。

このようなことから早期展葉は、その年の果実品質だけでなく翌年の生産にも大きな影響を及ぼします。こうならないためには、先に述べた花芽の整理や摘らい、早期摘果をしつかり行つて早期展葉をはかります。

また、開花期前後に窒素主体の葉

面散布(メリット青五〇〇倍かスパークロゲン五〇〇倍)を二〜三回行い、展葉を促します。

授粉後一〇日目以降は、カルシウム剤の散布を二〜三回行つて葉を厚く強くします。

もも

摘らいの実施

摘らいは、貯蔵養分の消費を抑えて果実や新梢の初期生育を促進するため、また摘果作業の軽減と強摘果を回避するために行います。

ナシ以上に摘らいの効果が期待できますので、手抜きなく実施してください。

摘らいの時期は、充実した結果枝の先端の花芽が咲き始め全体的に出らいた頃になります。花卉が見え始めると、落としくくなります。

摘らいは、若木や樹勢が強い樹では少なめに、樹勢が弱い樹では多めに落とします。

側枝での摘らいの程度は、樹勢が強い樹では全体の約五〇%を、樹勢のやや弱い樹では一五cm以下の短果枝では全摘らい、その他の結果枝は約七〇%摘らいします。

摘らいが間に合わなかった場合は、



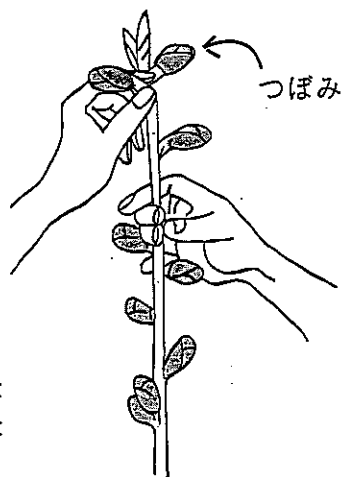
開花後でも着果が不必要な部分は摘花してください。

授粉

自家結実生のある品種では基本的に行いませんが、開花期に低温時には毛ばたき等でたたきます。花粉がない品種との混植園では、

まず花粉のある品種を毛ばたきでたいて花粉をつけ、次に花粉のない品種をたいて花粉をつける、という作業を繰り返して行います。花粉がない品種のみ、あるいは花粉のある品種の少ない園や開花期が違う園では次の要領で人工授粉を行います。花粉の多い白鳳系の花を授粉三日

先端部と基部の花芽を取り、中ほどを中心に6〜8個の花芽を残す



先端部と基部の花芽を取り、中ほどを中心に3〜4個の花芽を残す

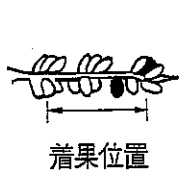
長果枝 (30〜50cm)



中果枝 (15〜30cm)



短果枝 (5〜15cm)



基部の花芽を取り、先端部の位置のよい花芽を1〜2個残す

- △ : 葉芽
- : 残す花芽
- : 取る花芽

第2図 摘らいの方法

くらい前に一〇aあたり二〜三kgを目安に採取し、蒞を集めて直射日光の当たらない二〇℃くらいの暖かい場所に広げ花粉を集めます。

花粉は石松子で二〇〜三〇倍に増量し、筆または毛ばたきを使って丁寧に着果させたい花にこすりつけます。

授粉は五分咲きと満開の二回に分けて行いますが、一回で行うときは八分咲きの時に行います。できるだけ風のない暖かい日に行ってください。



ブドウ（ハウス栽培）

フラスター液剤の散布

結実対策として、展葉八〜一〇枚時にフラスター液剤を散布します。散布時期が早すぎると開花期に効果がなくなり、新梢が伸び出して実止まりが悪くなるのが考えられますので、開花の五日前を目安に散布してください。

また、散布にあたっては地区の技術員と相談して散布するようにしてください。散布濃度は、五〇〇〜八〇〇倍液を全面散布します。

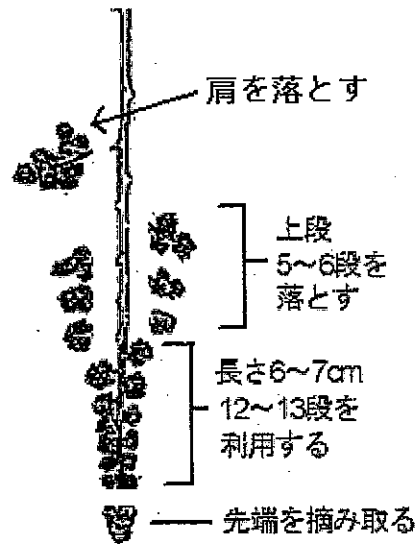
花穂の間引きと整形

花穂の間引きと整形を行うことで、残った花らしいに多くの養分が供給され、結実や初期の果粒肥大がよくなります。

新梢管理と同じように樹勢により時期や程度を変え、樹勢が弱いものは早めに強く、樹勢が強いものは弱めに遅く行います。

弱い新梢の花穂は早めにすべておとし、中庸のものは一〜二花穂残します。伸長が旺盛なものは様子を見ながら二〜三花穂残します。

しかし、樹勢が旺盛な樹では結実が悪くなりやすいので、摘穂は行わ



第3図 巨峰の花穂整形方法

ず開花期に房の整形だけを行い、実止まり決定後に不要な花穂を落としておかまいません。花穂の整形は、開花五〜七日前からおこないます。間引きと同様に弱いものは先に強いものは遅くして開花始め〜開花期に行います。花穂整形の良否が、収穫時の房型に影響します。にぎり房に仕上げるため整形位置に注意して実施してください。

授粉の手助け

ブドウの授粉は、花冠（キャップ）がはずれる際に花粉が柱頭に付着して行われます。

前述したように、天候によってはキャップの取れが悪くなりますので、穂軸を指先で軽くたたいたり、棚をたたいたりして授粉の手助けを行います。

キャップを取れやすくする資材として、トルキャップがあります。開花期前後の薬剤散布の際に五〇〇〜一、〇〇〇倍で混用して使います。

ホウ素欠乏対策

ホウ素欠乏になると、開花時に花

冠の離脱が悪く茶褐色となつていつまでも花に残るため、花穂が茶褐色にみえます。結実は悪く、結実しても果粒は小さくなり、商品価値が低くなります。

ホウ砂の散布は、開花期だけでなく生育期間中は常に補給するようにします。通常の農薬散布の時に、二、三〇〇〇倍から六、〇〇〇〇倍程度で混用散布します。

ただし、開花前には五〇〇倍から一、〇〇〇倍の濃度で開花二週間前と一週間前の二回、ほう砂と同量の生石灰を加えて散布します。開花前のポルドー液の散布時に、混用散布もできます。

キウイフルーツ

キウイフルーツは、県南部では九月の台風の影響で早期落葉し、今年の花が極端に少ないことが予想されます。このような園では、少ない花を確実に着果させ、少しでも生産量を上げる必要があります。

一方、台風の被害をほとんど受けていない地域では平年並みに着花すると思われ、早めの摘らひ、摘果を行い、大玉果生産につなげる必要があります。



摘らい

着花の少ない園では、小花の除去程度におさえます。花が少ない分確実に授粉し、結実できれば果実肥大

は期待できます。

平年並みに花がある園では、つぼみが確認でき次第小花や一番基部の花を除去し、残った花の充実をはかります。花が多いほど摘らいが遅れると肥大不良などの影響が考えられるので、早め早めの対応が必要になります。

人工授粉

最近ではほとんど輸入花粉を利用されていると思いますが、使用する花粉についてはあらかじめ発芽率の調査をして使用してください。

特に、一年以上保管しておいた花粉については注意してください。

授粉は、従来の石松子を利用したほん天による授粉と溶液授粉があります。

溶液授粉は、

花粉を専用の溶液（ポレンエイド

やかん天十シヨ糖液）に溶かして使用するもので、小雨程度なら作業が可能で省力的な方法です。特に、面積が広い場合に威力を発揮します。

具体的な方法については、四月号に掲載する予定ですが、検討されている方は果樹試験場または各JA、普及センターへお問い合わせください。

新梢管理

花が少ない園では、平年以上に新梢管理が重要になります。平成二〇年産に向けた結果母枝の充実・確保を念頭に置いて、誘引や摘心など新梢管理をしっかり行いましょう。

花が多い園も同様ですが、棚下が暗くならないよう管理を徹底します。



晩霜対策

三〜四月にかけて霜害を受けると収量に大きな影響を及ぼすため、降霜を想定して常に準備しましょう。

午後六時に七〜八℃で一時間に約一℃ずつ気温が低下し、風がやみ晴天となったら、必ず晩霜対策を行ってください。

雑草が繁茂している場合や敷きわ

らを行っていると、地表面からの放熱を妨げ霜害を助長するので除草を徹底し、敷きわらは株元に寄せておきましょう。

霜害が心配される場合は、固形燃料等の利用による燃焼法で防霜にとめませんが、次のことに注意してください。

①園の外周に多く配置する。

②冷気の入りやすい方向は多くする。

③傾斜地では、低い方に多く配置する。

④日の出前後が最も危険なため、特に注意する。

⑤わらなどのマルチ資材は、除去しておく。

⑥土壌が乾燥しているようであればかん水する。

また、凍霜害を受けたモモ、ナシなどでは、開花が遅れている花にも丁寧に人工授粉を行いましょう。

開花期〜幼果期に凍霜害を受けた場合は、摘果を遅らせ健全果と被害果の判定ができるようになってから摘果します。

生育初期に被害を受けた場合は、その後の生育が劣るので、生育状態に応じて新葉の展開後に葉面散布布を行います。

花軸から花蕾までの小枝梗の長さは1 cm以内。ここが長いとバラ房となる。



確実に授粉させるため花軸を軽くたいたいてキャップのとれを良くする。

第4図 満開期の状態